

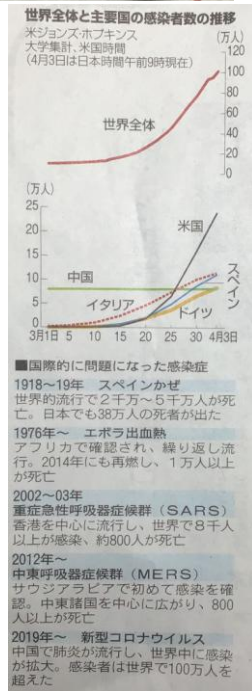
「三つの密」都市そのもの

写真は朝日新聞 4 月 3 日夕刊 1 面。世界の新型コロナウィルスの感染者数が日本時間の 3 日午前、累計で 100 万人を突破し、死者数は 5 万人を超えた。米ジョンズ・ホプキンス大学による同日午前 9 時現在での集計では、感染者が最も多いのは米国で約 24 万 4 千人。ドイツが約 8 万 4 千人と中国を追い抜き、米国、イタリア、スペインと合わせた欧米 4 カ国で 50 万人超と全体の半数以上を占めた。

グローバル時代の感染症である。WHO は 3 月 11 日に世界的な流行を意味する「パンデミック」と認定した。その頃の感染者数は 10 数万人だったので、感染拡大のペースが速まっている。ここでは、同紙 2 日夕刊「環境」竹内啓二・元編集委員の標題を紹介したい。

新型コロナウイルスは、日本だけでなく、欧米の主要国で瞬く間に人の移動と経済を止め、世界をマヒさせてしまった。今更ながら、一つのウィルスの怖さ、それに翻弄される現代社会の弱みに驚く。専門家は密集場所、密接距離、密閉空間という「三つの密」を避けるという。当然だが皮肉である。人間が作りあげてきた便利な大都市の機能はその「三つの密」で出来ているようなものだ。満員電車で職場に行き、人と会い、また電車やバスで帰路につく。大勢の人間が動くことが経済を動かしている。治療薬がない今、ウィルスを抑えるにはウィルスが好む都市機能を封印するしかない。「過密なイベントをしない、自宅から出ない、学校は休む」。しかし、これを長続きさせることはきわめて難しい。厳しくすればするほど経済への打撃が大きくなる。人が消えた街で日々、商店やレストランが追いつめられている。日本の子どもたちは、もう相当長い間、家庭に「密閉」されている。知り合いの産業カウンセラーから「コロナ鬱」という言葉を聞いた。長期休校で家にいる子どもの世話をしなければならない、外出できない、生活のリズムが狂うなどストレスで体調を崩す大人たちのことだ。

季節性インフルエンザ並みとされる感染力、経済への打撃、医療崩壊の危機、社会に蓄積するストレス。どうすればいいのか。「緊急事態宣言」「都市の封鎖(ロックダウン)」といった話が飛び交っているが、国民の政府への信頼感がなければ「劇薬」も副作用が大きい。闘いは長丁場になる。政府は経済的打撃に配慮した政策を丁寧に国民に説明する必要がある。過去にも SARS など危険な新型ウィルスが現れ、世界があわてた。背景にはコントロールができていない急激な都市化、人とモノが動くグローバリゼーションの肥大化がある。弱点を問いたださないと、今後も繰り返すことになる。問われているのは過密な都市の生態そのものだ。



(2020年4月4日)